

○アパート・雪嶋の部屋（朝）

片付いた部屋に朝日が差し込む。
雪嶋由宇（20）、水が入ったグラスを
机に置く。

雪嶋「ごめん、今日は水で勘弁して」

雪嶋「ごみをまとめながら、

雪嶋「麦茶は昨日飲み切っちゃってさ。作っ

てもよかったんだけど残ったら困るから」

グラスで反射した光が部屋一面に散ら

ばり、キラキラと輝く。

ごみ袋を縛る雪嶋、ボディーバックを

身につける。

雪嶋「机の前に戻ってきて、微笑み、

雪嶋「俺もすぐそっちに行くから」

雪嶋「部屋を出る。」

机の上の写真立て、文化祭のステージ

を背景に、赤いドレスを着た茜夏樹（

19）が笑っている。

その前に水のグラスと遺書の封筒。

タイトル「微熱」

○坂道

白い雲が浮かぶ青空。

セミの声が響く。

コンクリートの緩やかな坂を上る雪嶋

、菊の花束を持っている。

ガードレールの向こうに小さくなった

街。

○自然公園

高台に作られた公園。

遊具はなく、木のベンチや東屋のみ。

白いワンピースを着た芳野菜月（25

）、柵の前に立ち、景色を眺めている。

端の柵が壊れている。

やってくる雪嶋、菜月に気づいて足が

止まる。

菜月の後ろ姿と茜の面影が重なる。

雪嶋、歩き出す。

菜月、足音に気づき振り返る。

雪嶋 「その瞬間、茜から菜月に戻る。」

雪嶋 「……」

菜月、一瞬足が止まるが、再び柵へ。

菜月、雪嶋と入れ替わるようにその場を離れ、出入り口へ。

雪嶋、壊れた柵の前に立つ。

崖の下には薄紫の花、ハナシノブが風に揺れている。

雪嶋、花束を投げる。

菊が宙に舞い、薄紫に落ちていく。

見ている雪嶋の頬に涙が流れる。

風が吹き、木々が揺れる。

雪嶋、足を一歩進める。

菜月、手を伸ばし、雪嶋の腕を掴む。

雪嶋、菜月を見る。

雪嶋 「……何か？」

菜月、息が切れて答えられない。

雪嶋 「離してもらえませんか？」

菜月、首を振り、より力を込める。

雪嶋 「エゴって言うんですよ」

菜月 「……気分が、悪いです」

雪嶋 「は？」

菜月、貧血で倒れる。

雪嶋 「はあ！？」

× × ×

菜月、ベンチで横になっている。

雪嶋、菜月に水のペットボトルを差し出す。

菜月 「(起きて) すみません」

菜月、受け取る。

雪嶋、ベンチに座る。

菜月、ペットボトルを開けられない。

雪嶋 「は？」と思いつながらペットボトルを開け、渡す。

菜月 「ありがとうございます」

菜月、鞆から薬を出す。

雪嶋、薬の量に驚く。

菜月 「死ぬ気ですか……？」

菜月、病院で処方された正常な量です」

菜月、薬を飲む。

雪嶋「そんな幽霊みたいな顔じゃ説得力ないです」

菜月「それを言うならあなたも」

雪嶋「……」

菜月「思い入れが？」

雪嶋「無神経だと言われませんか？」

菜月「（むっ）ええ、無神経で頑固でおせっかいだと言われます」

雪嶋「驚き、笑いが零れる。」

菜月「そこまで言っていないんですけど」

雪嶋「雪嶋、立ち上がる。」

菜月「腕を離し、立ち上がる。」

雪嶋「おせっかいですね」

菜月「知ってます」

雪嶋「出入り口へ。」

菜月「付いてこないでくれますか？」

雪嶋「どうかせ帰道一緒に帰りますか？」

菜月「幽霊なら飛んで帰ればいいじゃないですか」

菜月「残念ながらまだ人間なんです」

○ 駅前・大通り（夕）

雪嶋「駅から出てくる二人。」

菜月「濡れ衣です」

雪嶋「濡れ衣です」

雪嶋 「もう会うことはないですね」

菜月 「お元気で」

雪嶋 「皮肉ですね」

雪嶋 「それじゃ」と別れる。

二人、互いに背を向け、歩き出す。

菜月、後ろから駆けてきた男性がぶつかる。

男性 「あつすみません」

菜月、男性から遠ざかる。

菜月 「……いえ」

菜月、恐怖で震える手を抑える。

男性、頭を下げて去る。

菜月、「あれ？」と振り返る。

雪嶋はもう見えない。

○アパート・雪嶋の部屋（夕）

雪嶋、玄関を閉める。

雪嶋 「……」

雪嶋、部屋に上がり、机の前へ。

写真を見て後悔と涙がこみ上げる。

膝を着く雪嶋、遺書を握りつぶし、う

ずくまる。

体が机に当たり、グラスが倒れる。

水が広がり、机から滴り落ちる。

雪嶋の携帯に着信。

○マンション。外観（朝）

○同・菜月の部屋（朝）

菜月、キヤミソール姿でぼんやり雪嶋

を掴んだ手を見ている。

戸が開き明生滯（25）が顔を出す。

滯 「菜月？」

菜月「（振り返り）おはよ」

滯 「おはよ」

滯、菜月の胸に残っている手術痕を見

る。

滯 「……」

滯、菜月を抱きしめる。

菜月 「どうした？」

滞「んー？ 今日も好きだなんて」
菜月「（照れて）なあにー」

○本屋・外観
年季が入った建物。

○同・ロッカールーム
壁にロッカーが並び、休憩用の椅子と机が置いてある。
出勤してくる菜月。

店長「（56）、喋りながらやって来て、あ、芳野さん。ちようどよかった」

店長「今日から復帰する雪嶋くん」

雪嶋「顔を出す。」

雪嶋と菜月、お互いに「！」と。

店長「（雪嶋に）最近入った芳野さん。今日は返品教えてあげて」

雪嶋「：：：わかりました」

店長「部屋を出る。」

菜月「お元氣そうで：：：」

雪嶋「：：：おかげさまで」

雪嶋と菜月、ロッカーへ。

菜月、ロッカーを開ける。

雪嶋「は？ 何でー」

菜月「？」

雪嶋「：：：いえ」

雪嶋「手早く支度して部屋を出る。」

残される菜月。

○同・バックヤード

菜月「ハンドイの電源を入れる。」

雪嶋「戸を足で開け、ブックトラック

を二台引いてくる。」

菜月「乱暴さに驚く。」

雪嶋「作業台の横にブックトラックを

置き、段ボールを取りに行く。」

菜月「恐る恐る雪嶋の方へ。」

雪嶋「あの、何かお手伝いを：：：」

雪嶋「（振り返り）そこ邪魔なんでどいてくだ

なつたから遅くなる」と滯にメッセー
ジを送る。
すぐに「迎えに行くね」「お酒は飲んじ
やだめだよ」と返ってくる。

○同・店内（夜）

座敷に上がる菜月、雪嶋を中心に盛り
上がっている。
隅に座る菜月、少し居心地が悪い。
そこへ男のバイト2がやってくる。

バイト2「何飲みます？」

菜月「あ、えっと……」

菜月、バイト2と距離を取りつつメニ
ューを見る。

菜月「ウーロン茶を」

バイト2「酒じゃなくて？」

菜月「飲めなくて」

バイト2「えー、一緒に楽しみましょうよ」
店員「失礼しまーす」

店員、ビールジョッキをドカドカと置
く。

バイト2「ちようどいいや、これあげます」

バイト2「えっ……」

バイト2「すみません追加いいですかー」

バイト2、店員を追いかける。

菜月、周りを見る。

アルコールが入ってさらに盛り上がっ
ている。

菜月「……」

菜月、諦めてジョッキを持つ。

雪嶋、ジョッキを奪い、菜月の横に座
る。

二人の間に少し距離が空いている。

菜月、雪嶋を見る。

雪嶋、ウーロン茶を菜月の前に置く。

雪嶋「ウーロン茶です」

菜月「（見て）いいんですか」

雪嶋「飲めないんですよね」

菜月「……雪嶋さんは飲める人……？」

雪嶋「二十歳になったんで飲める人です」
菜月「それはおめでたいですね。これから楽しいことがいっぱい……」
菜月、「あれ？」と。
雪嶋、ビールを飲む。

○同・外（夜）

店から社員やバイトがぞろぞろ出てくる。

続く雪嶋、最後に菜月。

社員やバイト、「おつかれー」と帰っていく。

菜月、雪嶋に近づく。

菜月「あの」

雪嶋、振り返る。

菜月「お酒、ありがとうございます。気分

悪くないですか？」

雪嶋、朗らかに微笑む。

雪嶋「平気です。思ったよりおいしかったです、あれくらいじゃ酔わないです」

菜月「（ほっとして）よかったです」

微笑む菜月、茜の面影が重なる。

雪嶋、手を伸ばし、ふらっと菜月に近づく。

咄嗟に支える菜月、雪嶋を見上げる。

その姿は菜月に戻っていて。

我に返る雪嶋、距離を取る。

菜月、声をかけようと口を開く。

その時、濡の車が横に止まる。

菜月「（あ）迎えが」

雪嶋、菜月の顔を見ず、

雪嶋「お疲れさまです（歩いていく）」

菜月「お疲れさまです」

菜月、車へ。

○濡の車・中（夜）

菜月「ありがと」

濡「ごめん遅くなって、大丈夫だった？」

菜月「大丈夫、お酒は飲んでないよ」

濡「そうじゃなくて」

菜月「ん？」

漣、雪嶋を見る。

菜月、視線を追って「あ」と。

菜月「平気だった」

漣「(えっ)」

菜月、支えた手を見ながら、

菜月「何でだろうね」

漣「……」

漣、車を出す。

○通り・居酒屋前(夜)

漣の車が通り過ぎる。

目で追う雪嶋、菜月に触れようとした

手を見る。

雪嶋、手を握りこみ、深い溜息。

○マンション・リビング(朝)

ベランダで洗濯物がはためく。

食卓に置いてある携帯に瑞樹(25)

から着信。

菜月、携帯を取る。

菜月「(出る)もしもし瑞樹？」

瑞樹(声)「菜月? 久しぶりー元気？」

菜月「元気だよ、どうしたの？」

菜月、ソファアに座る。

瑞樹(声)「あのねー、実は結婚することにな

ってー」

菜月「えっおめでとう!」

瑞樹(声)「ありがとー。それで、結婚式の招

待状送りたいんだけど」

菜月「えー嬉しい。あ、住所変わってるから

あとで送るね」

瑞樹(声)「あ、もしかして彼氏と?」

菜月「あー……違うよー」

瑞樹(声)「そっか、まあ菜月って昔から恋愛

に興味ないって感じだったしね。じゃあ、

住所お願いね、また連絡する」

菜月「うん、またね」

電話を切る菜月、キッチンに戻る。

シンクに置いてあるペアのマグカップ

菜月、皿洗いをする。
× × ×
ソファ―に座っている菜月、瑞樹に住
所を送る。
菜月、溜息を吐きながら寝転がる。
視線の先に通勤で使っている鞆。
菜月、その中から文庫を出す。

○同（夜）

食卓の上にはレバナラ。
漣、あまり箸が進んでない。

菜月「美味しくない？」
漣「あ、いや、珍しいなって。菜月、こ
うの―」

菜月「何か急に食べたくなって。貧血にも
いつて聞くし」

漣「そっか……。今日何してた？」
菜月「家のこととして、あとは本読んだり？」

漣「え……」
菜月「あ、そうだ。高校の友達が今度結婚す
るんだって。行ってもいい？」

漣「……あ、うん。もちろん」
菜月「ドレス借りなきや。どうい
うのがいい
かな」

漣「落ち着いた色がいんじゃない？」
漣「……漣、ソファ―の上の文庫を見て、

漣「……」

○本屋・ロッカールーム

菜月、出勤してくる。

雪嶋、椅子に座ってロッカーを見てい
る。

菜月、雪嶋の視線を追う。

菜月「？」

菜月、雪嶋の顔を覗き込んで、

菜月「おはようございます」

雪嶋「（驚く）おはようございます……」

菜月「あの―」

雪嶋、部屋を出る。

雪嶋「……。相変わらず無神経ですね」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「綺麗ですよ。知らないです」

菜月「いえ、知らないです」

雪嶋「あなたを待ってるって花言葉があるんです」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

菜月「……。」

雪嶋「……。」

○焼肉屋・店内（夕）
煙たい店内。

雪嶋「俺が風邪ひいた時、カロリーある方が
元気になるからってピザを食わされたことがある
あるんです」
菜月「雪嶋さんを見てると勝手に体が動くん
です」
菜月「子供扱いしないでください」
雪嶋「子供というよりか犬のほうが近いよう
な」
菜月「は？犬？」
雪嶋「猫の方が好きですか？」
雪嶋「そういうことじゃ：：」
雪嶋「笑っている。追加、どうします？奢
りますよ」
菜月「えっ、ダメです。連れて来た私が払い
ます」
雪嶋「芳野さんっていくつでしたっけ」
菜月「二十五です」
雪嶋「（笑う）見えな」

網の上の肉が焼ける。
菜月、肉をひっくり返す。
雪嶋の前の皿に焼けた肉が積まれてい
る。
菜月、雪嶋を見て、
菜月「あ、ご飯頼みますか？」
菜月「タブレットを操作」
雪嶋「芳野さんって変な人ですね」
菜月「人はみんなどこかしら変です」
菜月、雪嶋にタブレットを差し出す。
雪嶋、菜月を見て、茜を重ねる。
茜、雪嶋に微笑む。
雪嶋「：：似てるんですよ。言葉とか行動が
見た目は全然違うのに」
菜月「：：」
雪嶋、菜月からタブレットを受け取る

菜月「でも後輩ですよね」

雪嶋「じゃあ先輩の俺が奢ります」

菜月「あ、ずるいです！」「何が好きですか？」

雪嶋「：：最近レバーが好きになりました」

雪嶋「珍しいですね、俺もです」

× × ×
雪嶋「意気揚々とタブレットを操作。
テールブルいっばいに肉や野菜が並んで
いる。」

雪嶋「サークルは何やってみました？」

菜月「演劇です」
雪嶋「へーすげー」
二人、喋りながら肉を焼き、食べる。

○本屋・バックヤード
包装の練習をしている菜月、紙が破れ

雪嶋「壊滅的に才能がないです」

菜月「見放すの早すぎませんか？」

雪嶋「絆創膏の前科を忘れたとでも？」

菜月「そんなつもりはなかったんです」
雪嶋、笑う。

○アパート・雪嶋の部屋（日替わり）
生活感戻ってきた部屋。

机の上の写真立てが伏せられている。

○本屋・倉庫
雪嶋、コピー用紙を取り出す。

菜月、台車を持って来る。

雪嶋、台車に乗る。
驚く菜月、降りるよう台車を揺らす。

笑う雪嶋、降りて菜月に交代するよう
ジェスチャー。
菜月、渋々台車に乗る。

雪嶋、そのまま台車を動かす。
振り返って笑う菜月の姿が茜。

○アパート・雪嶋の部屋（日替わり）
机の上に写真立てがない。

○本屋・バックヤード
二人、雑誌の付録組みをしている。
菜月の輪ゴムが弾け飛んで向かいの雪嶋をかすめる。
雪嶋、指のゴム鉄砲で仕返しする。
笑って避ける茜。
遊ぶ二人。

○マンション・リビング（朝）
。 溍、郵便物を手に玄関から戻ってくる
溍、食卓に置いて菜月の部屋へ。

○同・菜月の部屋（朝）
眠っている菜月。
溍、頬にキス。
菜月、目を覚ます。
溍「おはよ、体はどう？」
菜月「休み」
溍「じゃあ一緒に居れるんだ」
菜月「ねえ菜月、デートしない？」
菜月、笑顔に。
溍、菜月の髪をアレンジする。

○駅中・デパート・点描
インテリアショップ。
溍と菜月、家具や食器を見て回る。
× × ×
アクセサリショップ。
溍、菜月の髪飾りを選ぶ。
菜月、溍のピアスを選ぶ。
× × ×
フールドコート。
溍と菜月、生クリームワッフルを分け

合って食べる。

○同・レディースフロア

漣の携帯に着信。

漣「(見て)あ、ごめん、職場からだ」

菜月「いいよ。適当に見てるから」

漣「ごめん、すぐ戻る」

漣「階段の方へ。」

歩く菜月、パーティードレスを見つけてる。

菜月、テナントに入る。

青や緑のドレスを見るがどれもピンとこない。

雪嶋(声)「何してんすか？」

菜月、振り返る。

菜月「雪嶋さんこそ」

雪嶋、上を指さして、

雪嶋「俺は本店に廻す本を持って行った帰り

菜月「上に本店があるんですね」

雪嶋「そー。(ドレスを見て)着る予定が？」

菜月「友達の結婚式があるんです。決めないとなーと思ってるんですけど、どれにしたいか」

菜月、ドレスを見て歩く。

菜月の髪型が写真の茜と同じで。

雪嶋「赤」

菜月「赤？」

振り返る菜月、茜の姿に。

雪嶋「赤くてふわふわしたやつがいい」

茜、考え、「わかった」と頷く。

雪嶋、微笑んで頷く。

○本屋・店内(日替わり)

買い物をする客。

○同・事務所

菜月、タイムカードを押す。

雪嶋(声)「あ、いいところに」

菜月「?(振り返る)」

脚立を担いで立っている雪嶋、「おいで」と手招き。

○同・店内

雪嶋、脚立に昇って日に焼けたポスターを剥がす。

菜月、古いポスターを受け取り、新しいポスターを渡す。

雪嶋「あれは？ 休み限定？」

菜月「あれとは」
菜月、テープを渡す。

雪嶋「可愛いやつ」
受け取る雪嶋、頭を指さし、

菜月「(ああ) 友達がやってくれて。滅多にやらないです」
雪嶋「へー」

菜月、「あれ？」と。
菜月「よく私だとわかりましたね」

雪嶋「え？ わかりますよ」
菜月「(え……?)」

店長「雪嶋くん。ごめん、それ破棄。誤字があるって連絡来た」

雪嶋「はい剥がしまーす」
雪嶋、ポスターを剥がし、脚立を降りる。

菜月、ポスターを貰う。
雪嶋、脚立を畳みながら、

雪嶋「人一倍ぼーっとしてるから」
菜月「(むっ) そんなことないです」

雪嶋「騙されて変な壺買ってそう」
菜月「買わないですよ」

二人、喋りながらバックヤードへ。

○アパート・雪嶋の部屋(朝)

引き出しからイヤホンを出す雪嶋、茜の写真が目に入る。

雪嶋、手を伸ばす。

×××
フラッシュバック。
台車に乗って笑う菜月。

輪ゴムを避ける菜月。
ドレスを選ぶ菜月、振り返る。

雪嶋「！」

× ×

雪嶋「雪嶋、引き出しを閉める。」

雪嶋「……」

○本屋・店内（朝）

雪嶋、品出しをする。

絵本の表紙に水色のドレスを着た女の

子が描かれている。

雪嶋、絵本を眺めて、

雪嶋「……せめてこういう……」

雪嶋、絵本を棚に入れる。

○ロッカールーム

雪嶋、昼食を食べながらパーティード

レスを携帯で検索して見ている。

雪嶋、溜息を吐いて携帯を伏せる。

○同・バックヤード

雪嶋、雑誌の返品をする。

ブライダル系の雑誌で手が止まり、パ

ラパラ見る。ウエディングドレスしかのってなくて

、閉じて箱に入れる。

○同・事務所（夕）

雪嶋「お疲れさまです」

店長「お疲れさまー。あ、そうだ。雪嶋くん

雪嶋「はい」

店長、紙袋を取り出す。

店長「茜さんのロッカーにあったものなんだ

けど、ご実家に送っても大丈夫かな」

雪嶋、中を見る。

文具や本、ビーチサンダルなど。

雪嶋「捨てないでくれたんですね」

店長「大事なものかもしれないから」

雪嶋「俺のものもあるので、貰います」

店長「そう？　じゃあお願いしようかな」

○ 駅前・大通り（夕）

雪嶋、紙袋を持って歩く。

雪嶋、ドレスを着た人とすれ違う。

雪嶋「（見て）……」

× × ×
菜月を探している雪嶋、ふと我に返り

帰ろうとする。

その時、菜月が駅から出てくる。

ボルドーのドレスを着た菜月、セットした髪に普段とは違う化粧。

雪嶋「……」

雪嶋、一瞬見惚れ、我に返って顔を歪ませる。

夕日に目を細める菜月、目もとのラメやグロスが輝き、風でイヤリングが揺れる。

雪嶋、一步菜月に近づく。

同級生が菜月に駆け寄る。

同級生「芳野、芳野」

同級生、菜月の肩を掴む。

驚く菜月、距離を取る。

同級生「あ、ごめん。驚かせて」

菜月、何とか笑って、

菜月「何？」

同級生「あー……、せっかくだしどこか行かない？」

菜月「えっと……」

困る菜月、雪嶋に気づく。

雪嶋「！」

同級生「芳野、すげー綺麗になってるからびっくりにした。こうやって会えたのも何かの縁じゃないかってー」

菜月「ごめん」

菜月、雪嶋の元へ行き、腕を組んで恋人繋ぎをする。

菜月「先約があるの」

驚く雪嶋、菜月の手がかすかに震えていることに気づく。

菜月「先約があるの」

驚く雪嶋、菜月の手がかすかに震えていることに気づく。

雪嶋、菜月の手を握り返す。
同級生「……あ、そっか、そうだよね。(笑う)
ごめんごめん」

同級生、駅へ戻っていく。

雪嶋、菜月を見る。
茜の面影が浮かぶことなく、菜月のま
ま。

力が抜ける菜月、ほつと息を吐く。

菜月「すみません、巻き込んでしまつて」

雪嶋「いえ……」

菜月、雪嶋を見る。

雪嶋、ドキッとする。

菜月、雪嶋とつないでいる手を見て、
菜月「雪嶋さんと全然平気なのに……」
雪嶋、にやけそうになり、顔をそむけ
る。

菜月、雪嶋に微笑み、

菜月「ありがとうございます」

菜月、歩き出そうとする。

雪嶋、手を離さない。

菜月「？」

振り返る菜月、少しよろける。

菜月「どうしました？」

雪嶋「……」

手を離す雪嶋、菜月が持っている引き
出物の紙袋を取る。

雪嶋「送ります」

菜月「……え」

雪嶋、持っていた紙袋からビーチサン
ダルを出しながら、

雪嶋「誰が見てるかわからないですし、もし
かしたら追いかけてくるかもしれないじゃ
ないですか。だから」

雪嶋、ビーチサンダルを菜月の足元に
置く。

菜月「(見て)え」

菜月、ビーチサンダルと雪嶋を交互に
見て、

菜月「えー(笑う)」

○帰り道・住宅街からマンション(夕)

菜月、ビーチサンダルを履いてヒールを手に持っている。
菜月、雪嶋を見る度クスクス笑う。
雪嶋「何ですか」
菜月、雪嶋の前に立ち、手で身長を比べる。
雪嶋「！別にそういうわけじゃ」
菜月、にこーっと笑って歩き出す。
風で踊るドレスのすそ。
雪嶋、菜月に見惚れる。

○マンション・リビング（夕）

菜月「お茶でも飲んでいってください。それくらいしかできませんけど」
雪嶋「あ、じゃあ：：」
菜月、テレビをつけてキッチンへ。
雪嶋、引き出物を置いてテレビの前に座る。

菜月「麦茶でいいですか？」
雪嶋「はい」
菜月、麦茶をコップに注ぎ、渡す。

雪嶋「雪嶋、受け取る。」
菜月、雪嶋の横に座る。
雪嶋「これ、俺も持ってます。映画化されたの知ってます？もう公開されてるらしいんだ」
菜月「知らなかったです。人気なんですネ」
窓から風が入り、菜月の髪を揺らす。
雪嶋、見惚れる。
菜月、気づいて「？」と。
雪嶋、テレビを見て麦茶を飲む。

○同・玄関（夕）

雪嶋「靴を履く雪嶋、振り返り、菜月を見る」
菜月「え？」

雪嶋 「芳野さんがよければですけど」

菜月 「(驚いて)……」

雪嶋 「いや、やっぱりー」

菜月 「ぜひ！ 行きたいです」

驚く雪嶋、ほっとして笑う。

雪嶋 「あ、連絡先、聞いても」

雪嶋、携帯を菜月に渡す。

菜月、番号を打ち込み、返す。

雪嶋 「じゃあ、また時間とか連絡します」

雪嶋、微笑み、部屋を出る。

○同・リビング(夕)

着替えた菜月、コップを洗い、夕食の

支度をする。

玄関が開く音。

漣 「ただいまー」

菜月 「おかえり」

漣、菜月をじっと見て、

菜月 「今日は一段と可愛いね」

漣 「それもあるけど、ニコニコしてる。結婚

式楽しかった？」

菜月 「ええ？ あ、友だちは綺麗だったよ」

○映画館・前

菜月を待つ雪嶋、足元を見ている。

雪嶋の足の前に菜月の足が現れる。

雪嶋、顔を上げる。

目の前に菜月が立っている。

雪嶋、頬が緩む。

○同・劇場内

スクリーンに恋愛映画が流れている。

菜月、そっと雪嶋を見る。

気づく雪嶋、菜月に耳を貸す。

菜月、首を振って「何でもない」と。

雪嶋、体を戻して微笑む。

菜月、微笑む。

二人、映画に戻る。

雪嶋、ちらっと菜月を見る。

菜月、夢中で見ている。

雪嶋、うっとり見つめ、映画に戻る。

寒い菜月、腕をさする。

× × ×
明かりがつき、まばらに人が去ってい

く。

雪嶋「面白かったですね。(菜月を見て)この

あと――」

俯いている菜月の顔が青白い。

雪嶋、菜月の手を握る。

雪嶋「すみません、気づかなくて」

菜月、雪嶋を見て微笑む。

雪嶋、菜月を抱き寄せ、腕をさする。

雪嶋「……」

○マンション・部屋前(夕)

雪嶋、菜月の肩を抱いている。

雪嶋「鍵、出せます？」

菜月、鍵を出す。

雪嶋「菜月？」

雪嶋、咄嗟に振り返る。

菜月を見ている雪嶋を見て眉を寄

せる。

菜月「……」

雪嶋、菜月を見て「ナツキ」だと理解

す。

雪嶋、駆け寄って菜月を雪嶋から引き離

す。

雪嶋「冷えている。大丈夫？」

雪嶋「……」

雪嶋「職場の……」

雪嶋「……」

雪嶋「もう大丈夫だから」

菜月、手早く鍵を開けて部屋に入る。

菜月、雪嶋を見る。

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

雪嶋「……」

○同・菜月の部屋（夕）
漣「毛布出す？ あったかいスーパ作ろうか」

菜月「体を起こす。」
漣「何？」

菜月「お礼……」

漣「そんな今度でいいじゃん」
菜月「あるかわからないの？」

漣「……！ ……何で、そういうこと言うかな……」

菜月「ベッドから出ようとする。」
漣「わかった、菜月を止めて、わかったよ」

○同・前（夕）
雪嶋「マンションから出て歩く。」
追ってくる漣、何て呼んでいいか悩む。

漣「ねえ！」
雪嶋「気づかない。」

漣「君！ 菜月の――」
雪嶋「振り返る。」

漣「ちよっと、勢いに驚きつつ。」

○同・菜月の部屋（夕）

漣「菜月を連れてやってくる。」
菜月「雪嶋に気づいて起き上がる。」

漣「毛布持って来るね」
漣「部屋を出る。」

菜月「漣を見送る雪嶋、ベッドの前に座る。」
菜月「ごめんなさい。せっかく誘ってもらったのに――」

雪嶋「また行けばいいんです」
菜月「ほっとして笑う。」
雪嶋「合わせて笑うが笑顔が消える。」

雪嶋「……芳野さんの名前……」

菜月「？はい」

雪嶋「……いい、名前です……」

雪嶋、誤魔化す様に笑うが上手く笑顔

が作れない。

菜月、雪嶋の手に触れる。

雪嶋、菜月の手を握る。

雪嶋「もう寒くないですか？」

菜月「はい」

雪嶋「よかった」

雪嶋、なんとか微笑む。

濡、二人を見ている。

×××

眠っている菜月。

濡、菜月の頬を撫でる。

○アパート・雪嶋の部屋（夜）

雪嶋、暗い部屋で携帯を見ている。

菜月とのメッセージのやり取り。

雪嶋、着信履歴を開く。

ずらっと並ぶ【茜夏樹】の名前。

○本屋・バックヤード

菜月、雑誌と付録を分ける。

菜月、戸を見る。

菜月「……」

菜月、作業を続ける。

○同・事務所（夕）

菜月「お疲れさまです」

店長「（小声）お疲れさまー」

菜月「（小声）どうかしたんですか？」

店長、ロッカールームを指さし、

店長「（小声）雪嶋くん、体調悪いみたいで、

上がってもらってもいいんだけど……」

店長、ロッカールームを見る。

菜月「（小声）伝えます」

○同・ロッカールーム（夕）

雪嶋、机に突っ伏している。

菜月、雪嶋に手を伸ばす。
雪嶋、起きる。

菜月「（驚きつゝ）お疲れさまです」

菜月が茜の姿に。

雪嶋「お疲れさまです、そらす。」

雪嶋「お疲れさまです」

菜月「店長が帰ってもいいと」

雪嶋「：：：そうですか」

立ち上がる雪嶋、帰り支度をする。

菜月、雪嶋を心配しつつ帰り支度。

雪嶋、荷物を持って出る。

菜月、追う。

○同・事務所（夕）

雪嶋「店長、すみません今日は」

店長「いいよいいよ。ゆっくり休んで」

雪嶋、会釈して店を出る。

菜月、雪嶋に続く。

○同・外（夕）

雪嶋、スタスタ歩いていく。

菜月、雪嶋を追う。

雪嶋、振り返る。

追ってくる茜。

立ち止まる雪嶋、眉を寄せる。

雪嶋「何ですか？」

菜月「立ち止まり、

菜月「送ります。心配なので」

雪嶋「：：：この前体調崩した人に言われた

くないです」

雪嶋、歩き出す。

菜月、追う。

○アパート・部屋前（夕）

雪嶋、鍵を開けて部屋に入る。

菜月、帰ろうとすると部屋の中から大

きな物音。

驚く菜月、扉を開けると雪嶋が転んで

いる。

○同・雪嶋の部屋（夕）

菜月、散らかった部屋に驚く。
雪嶋、リュックを適当に下ろしてベッ
ドへ。

部屋を片付ける菜月、冷蔵庫を開ける。

食材はほとんどない。

雪嶋「何してんすか」

菜月「おうどんなら食べられますか？」

雪嶋「：：：そういうのいいんで」

菜月「ご飯作ったら帰ります」

雪嶋「：：：」

雪嶋、布団をかぶり、菜月に背を向け
る。

× × ×
片付いた部屋。

菜月、うどんのどんぶりを机に置く。

雪嶋、目を覚ます。

菜月、微笑み、

「ちようどできましたよ」

雪嶋、菜月を見る。

一瞬、菜月が茜に。

雪嶋「：：：」

雪嶋、起きてテーブルの前に座る。

菜月、麦茶を置く。

菜月「それじゃ」

菜月、鞆を持つ。

雪嶋、鞆を掴んで止める。

菜月、とりあえず座る。

雪嶋、手を離し、考えて、

「：：：芳野さんも何か：：：」

菜月「あ：：：でも」

雪嶋、リュックからステイックパンを

出し、封を開けて差し出す。

菜月、受け取る。

雪嶋、テレビをつける。

雪嶋「いただきます」

× × ×
洗い物を終える菜月、雪嶋を見る。

雪嶋、ベッドで横になっている。

菜月、テレビを消して雪嶋の顔を覗く。
雪嶋、菜月を見る。
菜月「眠れそうですか？」
雪嶋、寝返りを打ち、菜月をじっと見て、
雪嶋「芳野さん」
菜月「はい」
雪嶋「はい」
菜月、ベッドの横に座る。
雪嶋「はい」
菜月「はい」
雪嶋「すみません今日、態度悪くて」
菜月「いいえ。頑固者の私がおせっかいで押しかけてるだけですから」
雪嶋「(少し笑って) 何すかそれ」
菜月「体調悪い時は自分勝手でもいいんです。わがまま言ってお世話してもらって、自分を甘やかす時間なんです」
雪嶋「……」
雪嶋「また少し笑う雪嶋、零れた涙を拭う。けど、芳野さんと居ると楽しいです。楽しいなり、時々しんどいんです。今だって一人になりたいの、帰ってほしくない。俺の質問なのに、どうしたらいいかわかんなくて」
菜月「……」
菜月、雪嶋に手を伸ばすが、途中でやめる。
菜月、雪嶋に背を向けてテレビをつける。
雪嶋、布団から少しだけ顔を出す。
菜月「見たいテレビがあるの、もう少し居させてもらいます」
菜月、チャンネルをパカパカ変える。雪嶋、菜月の優しさが嬉しくて、同時に苦しい。雪嶋、菜月を見る。

茜の姿が浮かぶことはなく、菜月のま
ま。雪嶋、布団にくるまったまま菜月のそ
ばへ行き、ゆっくり目をつむる。

○街並み（朝）

雨から晴れている空へ。

○アパート・雪嶋の部屋（朝）

ベランダに雨水が溜まっている。
空に細い煙が上っていく。
雪嶋、窓辺で線香を焚いている。
机の上にはお酒とケーキの箱。

○マンション・リビング（朝）

食卓の上に置かれた携帯に雪嶋から着
信。

菜月、画面を見て電話に出る。

菜月「はい」

雪嶋（声）『……今、大丈夫ですか』

菜月「大丈夫ですよ。どうしました？」

雪嶋（声）『……』

菜月「……どこに居ますか」

○公園（朝）

雪嶋「……」

雪嶋、ベンチに座って菜月と電話をし
ている。

× × ×

池の鯉が跳ねる。

雪嶋、足音がした方を見る。

やってくる菜月、雪嶋の隣に座る。

菜月「お花の所に居るかと思いましたが」

雪嶋「一人で行ったら芳野さんに怒られるの
で」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「怒りませんよ。でも心配にはなりません
」

菜月「雪嶋さんの心は雪嶋さんが決めていいんです」

雪嶋「苦しくて顔を歪める。菜月、雪嶋の顔を肩に抱き寄せる。」

菜月「思い出は過去になりませんが、無くなったりはしません。雪嶋さんが変わろうと大切なのは大切なままです」

雪嶋「好きになりたいんです。……でも忘れ

菜月「はい」

雪嶋「それでもいいと……？」

菜月「いいです。何も悪いことじゃない」

菜月「雪嶋さんが望むなら私はいつでも傍に居ます。辛かったら一緒に泣いて、悩んで、話を聞きます。力になれることは少ないけど、一番の味方でいます」

雪嶋「菜月の体に腕を回す。木々が風で揺れる。」

○アパート・雪嶋の部屋

雪嶋「菜月に覆いかぶさっている。」

菜月の首筋にキスをする雪嶋、菜月の腕やわき腹を指や手でなぞり、撫でる。

菜月、布団を強く握って恐怖を隠す。雪嶋、口にキスをしようとする。

菜月、咄嗟に顔をそらす。雪嶋、ふと我に返り、固く握りしめた

菜月の手に気づく。雪嶋、菜月の天井の天井に水面の光がたゆたう。

○濡の車・中

濡、物思いにふけている。フロントガラスに打ち付けられる雨。

○マンション・リビング（夜）

菜月、ソファに座っている。

漣、帰ってくる。

菜月、我に返ってキッチンへ。

漣、リビングにやってくる。

菜月、夕食の支度をしつつ、

菜月「おかえり」

漣、菜月をじっと見て近づく。

菜月「(えっ)」

菜月、一步引く。

漣、菜月を抱きしめる。

菜月、動揺している。

漣「ただいま」

菜月「……おかえり」

漣、漣、体を離す。

漣「着替えてくる」

菜月「うん」

漣、部屋へ。

菜月、罪悪感で目を伏せる。

○本屋・ロツカールーム

出勤する菜月、雪嶋が居ないことにほっとする。

菜月、ロツカーに荷物を入れる。

雪嶋(声)「休憩いただきます」

菜月、手早く支度をする。

雪嶋「……お疲れさまです」

菜月「お疲れさまです」

菜月、ロツカールームを出る。

雪嶋「……」

○同・バックヤード(夜)

菜月、ぼんやりしながら返品をする。

戸が開き、雪嶋が顔を出す。

菜月、気づかず作業を続ける。

雪嶋「もう終わりですよ」

菜月「(気づき)あっすみません、すぐ終わります」

菜月、ハンディを片付ける。

雪嶋、戸を閉め、菜月の近くへ。

雪嶋「……昨日は、すみません」

菜月「！」
 菜月「あ……いえ。むしろ私の方が申し訳
 ないというか、本当なら好きな人が居るべ
 きなのに――」
 雪嶋「それに――」
 菜月「え……」
 菜月、雪嶋を見る。
 雪嶋、真っ直ぐ菜月を見ている。
 雪嶋「代わりじゃないですよ」
 菜月「(わからなくて)……」
 雪嶋、菜月の反応を見て後悔がこみ上
 げる。
 雪嶋「順番を間違えた俺が悪いつてわかって
 ます。でも、違います」
 菜月、雪嶋から目をそらす。
 雪嶋「好きなんです」
 菜月、驚く。
 雪嶋「最初は似てるからっていうのもあった
 かもしれないけど、今はそんなじゃなく
 て」
 雪嶋の言葉と共に菜月の記憶がフラッ
 シュバックする。
 雪嶋(声)「具合悪そうだったら心配で何も手
 に着かないし」
 ロッカールーム、突っ伏している雪嶋。
 雪嶋(声)「そのくせ、笑ってる顔見るだけで
 嬉しくなってる」
 焼肉屋、タブレットを操作する雪嶋。
 雪嶋(声)「気づいたら体が動いてて」
 公園、雪嶋を見つけて駆け寄る菜月。
 雪嶋「自分がわからなくなるくらい。俺は、
 芳野さんが好きです」
 菜月、自分の行動を理解したくなくて
 首を振る。

雪嶋「……俺のこと嫌いですか？」
 菜月「！」
 雪嶋「触れることができて、好きにはなれ
 ませんか？」
 菜月「違うんです。そうじゃなくて。……同
 じことを雪嶋さんに……」
 雪嶋「……！」
 雪嶋、菜月に近づくが、菜月が距離を
 取る。
 菜月「ごめんなさい。私、とんでもないこと
 を」
 菜月、涙を浮かべる。
 雪嶋「芳野さん」
 菜月「濡に何て……」
 雪嶋「……（は？）」友だちが何で今——
 菜月「友達じゃありません。友達じゃなくて
 ……、付き合ってるんです。友達が落ちて
 菜月の髪が肩から流れ落ちる。
 雪嶋、アレンジされた菜月の髪を思い
 出す。
 雪嶋「……いいです。いいです。それでも。二
 番目でも、もつと下でも。なんなら男に慣
 れるための道具や踏み台にしたっていい」
 菜月、驚く。
 雪嶋「付き合いたくないわけじゃないけど、
 芳野さんの幸せを壊したいわけでもないん
 です。その人が好きならそれで、あなたは
 何も変わらなくていい」
 雪嶋、菜月の手に触れる。
 雪嶋「ただ、傍に居て欲しいんです」
 菜月、手を握り返さない。
 雪嶋「ダメですか？ あなたを好きでいるこ
 とも許してくれませんか？」
 菜月、雪嶋の手から抜ける。
 雪嶋「ごめんなさい……」
 菜月、胸を押さえる。
 雪嶋「……いつ死ぬかわからないから……」
 菜月「……何、言ってるんですか。死のうと
 した俺を止めたのは芳野さんですよ。あの

時、この腕を掴んだあなたが、俺の、今の
生きる意味なんですか、俺の、今の

菜月「心臓移植したんです」握りこむ。

雪嶋「私には誰かの命で生きてます。その人が

生きるべきだった時間を貰って、少しの間

延長している。ただ、それもいつ終わるか

わからない。そんな私が雪嶋さんの未来を

潰すわけにはいかない。私から雪嶋さんの

雪嶋「言葉が見つからない。」

菜月「涙を拭いて戸へ。」

雪嶋「菜月の腕を掴む。」

菜月「もがく。」

雪嶋「未来とか、先のことなんてどうでも

いい。俺は今、あなたと居たいんです。こ

いの時間を、この瞬間を、芳野さんと一緒

に生きる。この瞬間を、芳野さんと一緒

菜月「嬉しくても苦しくて、言葉

が浮かばない。」

雪嶋「欲しいものは全部あげます。言葉も居

場所、俺が持つてくるもの全部あげる。こ

の体も心も全部。望むことも全部叶えます

。だから、これで終わりなんて言わないで

ください。」

菜月「耐えられなくて涙を零す。」

雪嶋「あなたを好きだという気持ちを無くそ

うとしないで。」

菜月「でも。」

雪嶋「首を振って止める。」

菜月「涙を零し続ける。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「涙を抱きしめる。」

雪嶋「涙を抱きしめる。」

菜月「綺麗な最期っていいですね」
雪嶋「芳野さんには一生来なくていいです」
菜月「……」
雪嶋「お土産売り場見ましょ」
雪嶋「菜月と手を繋いで歩き出す。」

○同・売店

菜月「ぬいぐるみを見ている。」
雪嶋「欲しいんですか？」
菜月「あー、でも置き場所がないので」
雪嶋「うちに置けばいいじゃないですか」
菜月「いいんですか」
雪嶋「俺だって芳野さんとの思い出欲しいです」
雪嶋「どれ？」と。
菜月「サメのぬいぐるみを抱える。」
雪嶋「それ？」と笑う。

○大学・構内

菜月が持っている袋からサメの頭が出ている。
雪嶋「そいつ（サメ）は目立つけど芳野さんは違和感ないですね」
菜月「十九歳の女の子がここ（心臓）にいるので」
雪嶋「じゃあ後輩だ」

○同・図書館前

菜月、入り口前で待っている。
雪嶋、菜月の元にやってくる。

雪嶋「お待たせしました」
菜月「いえ」
男子大学生（声）「雪嶋？」
雪嶋、振り返る。

菜月、声が出た方を見る。
男子大学生「え、もしかして辞めに……？」
雪嶋「本返しに来ただけ」
男子大学生「何だよかったー。元気そうだし安心した。菜月に気づく」えっ……？」
雪嶋、視線を追って菜月を見る。

菜月、雪嶋と男子大学生を交互に見ている。

雪嶋「彼女」

菜月「驚いて雪嶋を見る。」

微笑む雪嶋、菜月と手を繋いで男子大

雪嶋「俺の彼女」

学生に、驚いて菜月の手を引いて駆け出す。

驚いている菜月、だんだん笑顔に。

○大学最寄り駅・ホーム

階段を駆け下りてくる二人、そのまま電車に乗り込む。

○アパート・雪嶋の部屋（夕）

二人、座り込む。

雪嶋「ごめんなさい、つい。出来心で」

菜月「嬉しかったです」

雪嶋「菜月をうっとり見つめ、キスをしよう」と顔を近づける。

菜月「察して体を固くする。」

雪嶋「気づく雪嶋、途中でやめる。」

雪嶋「すみません」

菜月「申し訳なくて俯く。」

雪嶋「芳野さん。もう一ヶ所、俺に付き合っ

てくれませんか」

菜月「？」

○寺・茜の墓前

菜月「雪嶋に花を渡す。」

雪嶋「向こうで待ってますね」

菜月「二人の時間ですから」

見送る雪嶋、花を生ける。

雪嶋「足音に気づいて振り返る。」

○同・水汲み場

菜月「桶を片付ける。」

○同・茜の墓前

茜の母「ありがとね、お供え物を置く。

雪嶋「いえ。むしろ遅くなつて申し訳ないく

らいで」

茜の母「茜の母、微笑み、

雪嶋の母「元氣そうでよかった」

茜の父「あのおかげさまで」

ま。いつまでもメソメソしてたら怒られてし

茜の母「そうね。本当、あの子には驚かされ

雪嶋「？」

茜の母「やっぱり知らなかったのね」

風が強く吹き、木々が揺れる。

菜月「雪嶋さん？」

我に返る雪嶋、菜月を見る。

菜月「大丈夫ですか？」

茜、雪嶋を見つめる。

雪嶋「：：」

○回想と茜の記憶・点描

雪嶋の部屋。点描

茜、冷蔵庫から麦茶を出す。

菜月、うどんを茹でる。

× バックヤード。

× 茜、返品作業をする。

× 菜月、返品作業をする。

× 雪嶋の部屋。

× 茜、文庫を読む。

× マンション。

× 床に落ちている文庫。

焼肉屋。
茜、肉を焼く。
菜月、食べる。
× × ×
バックヤード。
茜、覗き込むように顔を出す。

○アパート・雪嶋の部屋（夕）

菜月「どうしたんですか？」

雪嶋「菜月を見る。」

菜月「……窓、開けますね」

雪嶋「ボディーバックを外す。」

菜月の服が夕日に染まり、茜色に。

× × ×
フラッシュバック。

自然公園。
柵の前で立っている菜月。

× × ×
雪嶋「ボディーバックを落とす。」

雪嶋「いつでもか」

菜月「（えっと）去年の今？ ぐらいかと」

雪嶋「移植」
雪嶋「菜月を強く抱きしめる。」

菜月「夏樹……」

菜月「……雪嶋の体を手で押して体を離す。」

菜月「……誰、ですか」

雪嶋「菜月にキスしようとする。」
菜月「もがいて雪嶋と距離を取る。」

雪嶋「夏樹」
柵にぶつかる菜月、その衝撃で茜のノ

ートが落ちる。
菜月、落ちた【茜夏樹】のノートを見

菜月「……違う」
 菜月、首を振る。
 雪嶋「違う」
 菜月「私は、茜さんじゃー」
 雪嶋、菜月の腕を掴んで、
 雪嶋「アンタの言動がそう言ってるんだよ！
 ここ（心臓）にアイツが、夏樹が居るんだ
 っ、アンタ自身が証明してんだよ……！」
 菜月「十九歳の女の子ってだけでー」
 雪嶋「好きなものが一緒で、言葉も行動も似
 てて。俺だけがこうやって触れんの、違
 うなんてことあるかよ」
 菜月「……っ」
 菜月、必死に涙を堪え、雪嶋の手に触
 れる。
 菜月「……じゃあ、私のこの気持ちは？」
 菜月、雪嶋を見る。
 菜月「雪嶋さんを好きだと思っただけは勘違い
 ですか？ 顔が見たくなるのも、声を聞き
 たくなるのも。ここ（胸）にこもる熱も、
 全部私じゃなかったと……？」
 雪嶋「そんなのどうでもよくないですか？」
 菜月「（驚き）……」
 雪嶋、ベッドへ足を進める。
 菜月、押し進められながらもがく。
 雪嶋「好きで、好きで、一生大切にしよう
 ？ と思っただけになっただけでしょう
 ？」
 菜月の足がベッドに突っかかり、バラ
 ンスを崩す。
 雪嶋、菜月をベッドに押し倒す。
 雪嶋「その何が問題なんですか？」
 雪嶋、穏やかな笑顔。
 菜月、混乱して言葉が出ない。
 雪嶋「俺はね、ここに居るのがどっちのナツ
 キだろうと構わないですよ」
 菜月、混乱が恐怖に変わっていく。

雪嶋、菜月の体に手を這わせる。
菜月「！」

雪嶋「ああ、そうだ」

雪嶋「結婚しましょうか」

菜月「！？」

雪嶋「卒業してからのつもりだったけど、今しても何の問題もないですよね」

菜月「嫌……っ」

雪嶋「嫌……っ」

雪嶋「胸の傷痕が見える」

雪嶋「アイツの時間を使って生きるなら、これ（心臓）が辿るはずだった人生を生きてくれないでしよう？」

○街並み（夕）

雨が降る。

○マンション・部屋前（夕）

菜月の足元に水たまりができている。

俯いている菜月、髪から雫が落ちる。

菜月、鍵を出そうとする。

扉が開き、菜月の額にぶつかる。

漣「えっごめん！そこに居ると思わなくて

、本当にごめん」

額を押さえる菜月、「大丈夫」と笑うが

上手く笑えてない。

漣「びしょ濡れじゃんだろ。お風呂行

こう、そのあと冷やそう」

漣、菜月を部屋に入れる。

○同・リビング（夕）

風呂上りの菜月、額を冷やしている。

漣「大丈夫？」

漣、菜月に紅茶のマグカップを差し出す。

菜月「（受け取る）平気、ありがと」
漣、隣に座る。

冷蔵庫にあるのはアイステイから麦茶に
変わった」

菜月、雪嶋の家にある麦茶を思い出す

漣「あと……」

菜月「……漣を見る。

漣「どうして、本屋？」

菜月「え……？」

漣「……」

菜月「……家から近いし、時間も相談できる

から……」

漣「うん。でも、本読まないよね」

菜月「……」

漣「セリフに見えて話が入ってこないから買
うこともなかったのに、何でわざわざそこ
で働くんだらうって」

立ち上がる菜月、足がテーブルに当た

り、紅茶がかかる。

漣、タオルを取りに行く。

菜月、部屋を見渡す。

本棚も本もない部屋。

床に落ちていた文庫本。

漣「菜

月！」

漣、菜月の足に触れる。

菜月、反射的に漣から離れる。

混乱する菜月、涙を流しながらパニッ
クを起こす。

漣、菜月を抱きしめる。

○同・菜月の部屋（朝）

部屋の戸が開いて光が入る。

漣、菜月の頭を撫でる。

菜月、寝返りを打って漣を見る。

漣「足、痛くない？」

菜月、頷く。

ほっとして微笑む漣、カーテンを開け
る。

菜月「……窓に残った雨粒が光を反射する。
……お願いが、あるんだけど」

漣、振り返る。

○同・リビング
。着替えた菜月、文庫に気づき、捨てる

○坂道
漣の車が坂を上っていく。
空が曇り始めている。

○自然公園

入口前に漣の車が止まる。
菜月、車から降りる。

漣、窓を開けて、
漣「近くに止めてくるから」

菜月、額く。
漣、車を出す。
菜月、見送って柵の方へ。
菜月、壊れた柵の前に立ち、下を覗く

ハナシノブが風に揺れている。
菜月、姿勢を戻し、少し考える。

後ろから近づいてくる足音。

風が吹き、木々を揺らす。

手（雪嶋）が伸び、菜月の腕を掴む。

菜月、振り返る。

目の前に居たのは雪嶋で。

菜月、驚き、後退る。

雪嶋「危ないから、こっち」

雪嶋、菜月の腕を引く。
菜月、腕を引かれるまま柵から離れる

菜月「どうして……」

雪嶋、菜月に微笑み、

雪嶋「記念日だろ？」

怖くなる菜月、雪嶋の手を振り払い、

距離を取る。
無言で見つめる雪嶋、「ああそうか」と

雪嶋「じゃあ何で来たんですか？」

菜月「何かわかるかもと」

雪嶋「何を？」

菜月「何を、雪嶋を見る。」

菜月「何も思わなかったんです」

雪嶋「は……？」

菜月「この心臓が茜さんのもので、今までのことが私の意志じゃなかったとしたら、ここに来るのは苦痛なんじゃないかと思ったんです。……でも、何も無かった……」

菜月「ただ、胸を押さえ、雪嶋を見る。」

雪嶋「だから何ですか……」

菜月「……（え）」

雪嶋「意志とか心臓とかどうでもいいって言ったでしょ。そんなことのために危ないことしないでください」

菜月「……」

雪嶋「雪嶋に気づいて立ち止まる漣の足。」

雪嶋「雪嶋と菜月、漣を見る。」

漣「漣、菜月に駆け寄り、腕を引く。」

雪嶋「帰ろう」

雪嶋「どうせ知ってたんでしょ」

雪嶋「漣、立ち止まる。」

雪嶋「菜月、「え」と漣を見る。」

雪嶋「漣、雪嶋を睨み、菜月を見る。」

漣「……菜月が幸せならそれでいいと思った」

漣「漣、菜月から手を離す。」

○回想・駅前・大通り（夕）

漣、駅前を車で通りかかると、ドレスを着ている菜月を見つける。菜月、ビーチサンダルを履いて歩き出す。手を繋いでいる二人。

雪嶋「何で、俺の方が――」
 菜月「私は茜さんにはなれない」
 雪嶋「！」
 菜月「もがく。」
 雪嶋「雪嶋、掴む手の力を強めて、俺はあなたに居てくれるだけで――」
 菜月「でもしんどいんでしょ？」
 雪嶋「……」
 菜月「……」
 雪嶋「楽しいけどしんどいって、一緒に居るとそれは、前の話で……」
 菜月「言動が茜さんだという証拠になるのなら、私を見る度に思い出して苦しくなるんだよね？だから、記憶が混ざって――」
 雪嶋「それが何だかって言うんですか。大切な人をまた失うのとは比べれば、そんなの……」
 菜月「私が死んだら？」
 雪嶋「……！」
 菜月「私には、雪嶋さんより先に死ぬます。絶対、それは変わらない。」
 菜月「壊れた柵を見て、」
 菜月「あの日、ここでしたことを後悔しませぬ。」
 雪嶋「……」
 菜月「大切な人を見つけてください。私なんかと比べて笑って、生きて……」
 雪嶋「もう一度腕を掴もうとするが、届かない。」
 菜月「小さくなっていく菜月の背中。」
 雪嶋「動けない。」
 菜月「振り返ることなく歩いていく。」
 雪嶋「よろける雪嶋、足を滑らせてバランスを崩す。」
 雪嶋「体が柵の向こうへ。」

菜月「わかってる。でも、漣と家族を作りたいの
もわかって？」

漣「嬉しいが少し複雑。」

漣「あ、時計を見て、

漣「あ、ごめん。そろそろ行かなきゃ」
漣と菜月、席を立つ。

○同・外
店から出てくる二人。

漣「送れなくてごめんね」

菜月「いいよ。仕事頑張ってるね」

漣「家に着いたら連絡して」

菜月「わかってる」
漣と菜月、別れて歩き出す。

○商店街

歩く菜月の後ろ姿。

× × ×

菜月、八百屋で野菜を買う。

× × ×

菜月、クリーニングを受け取る。

× × ×

菜月、総菜屋の店員と喋る。

○タワーマンション・外観

入っていく菜月の後ろ姿。

○同・部屋前

菜月、鍵を出す。

その時、養子縁組のチラシを落とす。

チラシ、革靴の前へ。

手が伸び、拾う。

菜月「あ、すみません」

雪嶋（23）、チラシを見て、

雪嶋「子供ですか、いいですね。幸せの象徴
だ」

菜月「（見覚えがあつて）……」

菜月、雪嶋だと認識し、固まる。

菜月「……どうして……」

雪嶋、菜月に差し出し、

雪嶋「養子縁組か精子バンクもまあいいです
けどもっと簡単でいい方法がありませんよ」
雪嶋「俺と子供作ればいいんです」
雪嶋「菜月、青ざめて声が出ない。」
雪嶋「芳野さんは好きな人と子供を育てられ
る。俺は好きな人と子供が作れる」
菜月「：：私はい」
雪嶋「わかってますよ。俺は、芳野菜月さん
と子供を作りたいと言ってるんです」
菜月「：：！」
雪嶋「俺にとって大事な人は一人しかいませ
んから」
雪嶋「微笑む。」
菜月「震える体を懸命に抑える。」
終わり